



岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

Title	Stephen CraneのActive Serviceについて
Author(s)	各務, 鋭三
Citation	[岐阜大学教養部研究報告] vol.[2] p.[49]-[58]
Issue Date	1966
Rights	
Version	岐阜大学教養部英文研究室 (Faculty of General Education, Gifu University)
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/45952

この資料の著作権は、各資料の著者・学協会・出版社等に帰属します。

Stephen Crane の “Active Service” について

各 務 鋭 三

岐阜大学教養部英文研究室

I

作品「Active Service」は、クレインの死の前年、即ち1899年に出た。この年クレインは、ひどい tubercular hemorrhage に襲われていた。一般的に、このような時期に書かれた作品は、作家の円熟と枯淡を示し、その上もっとも回帰的な色彩を秘めていることが多い。しかし早くして世を去ったクレインという作家に、この通則をあてはめることは酷であるかもしれない。そしてまさしく作品「Active Service」を前にして、作品から受けるわれわれの印象は、この通則から大きくはずれる。同じ系列に属する作品、「The Third Violet」と比較するとき、この作品は、一層とりとめもない印象と、ある違和感のなかにわれわれを誘い込む。作品「Active Service」の示す世界が、クレイン文学のもう一つの素顔なのだろうか。この疑問が、この小論に対する私のキックとなったのである。「The Third Violet」は、いくらか破綻を示しながらも、クレイン文学全体のなかで、一つのポジションを占め得る作品であることを、私は他の拙稿¹⁾で確認した。一方「Active Service」は一見したところ、クレインらしい鋭さの少ないロマンティックな物語である。この作品も、「The Third Violet」と同じく、殆ど批評の対象外におかれた。その間の事情は、また「The Third Violet」の場合とよく似ている? 私は第一に、作品「Active Service」が、無視するに値する作品であるのか否か、その理由はどこにあるのか、第二に、クレイン文学全体のなかで、どのような位置に立つ作品であるか——このような角度から、作品「Active Service」を考察したいと思う。

II

作品の分析と考察をすすめる以前に、作品へのアプローチの手がかりを掴むため、私は作家と作品との間に照明をあてておきたい。このために、「クレイン書簡集」のなかにある作品「Active Service」に触れているクレイン自らの言葉に焦点を絞りたいと思う。

一般的にみて際立った点は、第一に作品「Active Service」のことを述べた手紙が非常に少ないことであり、第二に、作品の内容に立ち入った文句がみられないということである。

今具体的に該当する手紙をみてみよう。

- (A) . . . I am working now on a big novel. It will be much much longer than The Red Badge . . . ³⁾
- (B) . . . I have made a proposition to McClure that he advance £ 200 on the 1st of January for the book rights of my new Greek novel-not yet begun For heaven's sake raise me all the money you can and cable it, cable it sure between Xmas and New Year's . . . ⁴⁾

- (C) Dear Mr. Pinker: /The restrictions as to the serial publication of the novel are that it shall be concluded before the 1st of Nov. this year. As to price, I expect to get in the neighborhood of £ 600-- for the American serial rights but I would not know at all what to say in regard to the English serial rights. Of course you will get as much as you can and that is all I can say. The buyers of the English serial rights would have to come in consultation with the buyers of the American serial rights but the American buyers would be very docile. Yours faithfully.⁵⁾
- (D) . . . The novel is now at 48000-- words but the English market seems so stagnant and Reynolds is so successful that I have delayed sending you a copy of the first half of the book in order that I might get a copy off to Reynolds. I am confident that it will be the most successful book that I have ever published . . .⁶⁾

以上引用した手紙にあらわれたクレインの言葉を整理すると、次のようになる。

第一に、作品「Active Service」の製作の意図や、その内容とテクニクへの言及が全くみられない。わずかに、長篇を目指していたことが、(A)の手紙からわかるだけである。

第二に、この作品が出版されたのは、1899年であるが、既に1897年の10月には、製作の意欲を深めていたことが手紙の日付からわかる。しかし実際に、筆は未だとっていないようである。

第三に、手紙の中のクレインの言葉から、もっとも強く訴えてくるのは、金銭的要求をめぐって、あらわに示されるクレインの真摯な表情である。これは作品の執筆前後における作品と、実生活との間の実情を物語っている。

第四に、「Active Service」を、もっとも成功するに違いない作品であると、クレインは(D)の手紙のなかで述べている。「クレイン書簡集」の編者は、この点に言及して、クレインが新しい作品を、芸術的にも経済的にも、以前の作品より優位にみなすことは、必理的にみて当然なことであると補足している⁷⁾。しかしこのことは、一般論としては、十分認められることであるが、今この場合には、にわかに賛成することができない。寧ろ上述のコンテキスト一数通の手紙にあらわれたクレインの切々たる訴えと真摯な表情——から判断して、クレインが述べた、もっとも成功する作品であるという言葉の持つ真意は、もっとも大あたりする本、もっともよく売れる本という点に、ウエイトがかかっている言葉であると理解すべきだということがわかる。

以上はいずれもクレイン自身の手紙から引き出した点であるが、今さらにもう一つ、Cora Craneの手紙によって、その点の傍証を固めておきたい。

- (E) Dear Mr. Pinker: I send you 22 chapters of "Active Service." The balance you will get the end of this week.

Please do your very best to sell serially and give editors to understand that two weeks is the limit to keep Mr. Crane's copy. Please make this year fast rule for all of Mr. Crane's work. Editors have always subscribed to this for me, when I have been disposing of Mr. Crane's stuff.

Very truly yours⁸⁾

このコーラ・クレインの言葉は、第一に実生活におけるクレインの深淵を匂わせている。次いで作品「Active Service」は、22章のところ、一つのくぎりになっているという仕組を、間接にわれわれに物語っている。

以上この章で指摘した諸点は、作品分析に際して、無視することの許されない側面的な意義を帯びていると思われる。

III

この作品は、31章から成立っている。同じ系列に属する「The Third Violet」と比較した場合、この作品の分量は2倍である。しかも「The Third Violet」は、全体が33章であるので、平均的に云って、この作品の一つの章が占めるページ数は、「The Third Violet」のその2倍となる。ここで一見、論の展開にとって無縁と思われるような量的比較を示した真意は、このことが、この二つのよく似た作品の持つ異質性——いわば「The Third Violet」におけるモノフォニックな傾斜と、「Active Service」におけるポリフォニックな傾斜——とを、図式的といってよい程に、側面から物語っていると考えたからに外ならない。

今、作品における伝記的事実をみてみよう。作品「Active Service」は、Harold Frederic にすすめられ、ギリシヤ・トルコ戦争のときの報道通信員としての経験に基いて書かれたと言われている⁹⁾ われわれは、主人公 Coleman のなかに、クレインの姿を危くオーバーラップしかけるが、John Berryman は、Coleman のモデルとしては、寧ろ Edward Marshall とか Sylvester Scovel を考えている¹⁰⁾ 一方 Edwin H. Cady は、Nora Black のモデルを Cora Crane とみており¹¹⁾ その上さらに、大学生活のアカデミックな因襲的な生活を嫌ったクレインは、「Active Service」の中の学生達のどんちゃん騒ぎ、ヒロインの父、Wainwright 教授のポートレートへの侮蔑的描写をとおして、その気持を反映させていると迄云っている¹²⁾ しかし、私はクレインのこの作品の場合においても、特に伝記的事実を、直線的にこの作品に適用するには及ばないと思う。何故なら文学におけるリアリズムを重視したクレインは、“I decided that the nearer a writer gets to life, the greater he becomes as an artist.”¹³⁾ と述べているが、このことは決して私小説的発想に基くものではない。ひとえに絵空事を否定したのであって、方法意識としては現実へのべったり主義からは遠い。

しかしながら、作品とモデルという問題から離れて、前の章で既述したが、さらにもう一度、Edwin H. Cady の次の言葉を借りて、作品執筆前後の現実的条件——いわば作品と実生活という問題をめぐる——を、はっきり整理しておきたい。

But creative growth was at an end. He got involved in a good deal of meaninglessness like finishing *Active Service*, trying to write a Stevensonian romance to sell and still keep his integrity by kidding it in *The O'Ruddy*, or working on *Great Battles of the World*. He put merciless pressure on himself and on his agents, especially Pinker in London, and on publishers. He finally even achieved the mere pot-boiler in a good many of those last, desperate tales on which he toiled his life away at “Brede.” Not, of course, that he was unwilling.¹⁴⁾

Edwin H. Cady は、ここで作品「Active Service」をめぐって、第一に、金のために執筆するクレインの苦悩を述べ、第二に、この作品に対して否定的な評価を与えている。

かくして、作品「Active Service」は、死の前年に出されたという事実に深い意味を掘り起すべき作品ではないこと、まして強い芸術的衝動に突き動かされた作品でもないこと、結局のところ、もっとも直接的現実的な理由から生まれた作品であると言わざるを得ない。

勿論芸術作品は、作家の手を離れた瞬間、作品はそれ自ら一箇の独立した世界を形成し、作品の製作をめぐる様々な動機や理由は、第二義的な意味しか持ち得ないことは確かである。

それにも拘らず、かって W. フォークナーが、金儲けのために、作品「Sanctuary」(1931)を書いたと自ら語ったようには、クレイン自身この作品に関して述べていないが、やはりこのことは、この作品へのアプローチにとって重要な手掛りを持っていると思われる。それ故に、この点に関して、私は重複する程に、そのドキュメンテーションに力点を置いたのである。このような事情からみて、反面われわれが、作品「Active Service」を真正面から取扱おうとするとき、クレイン自身は、甚だ迷惑を感じているかもしれない。しかしながら今われわれは、作家の手を離れた瞬間、作品は独立した世界に息づくという論理の前に、この作品を置くことができるのである。

IV

はじめに、少しこの作品の梗概を追ってみよう。

登場人物は、ヒーロー Rufus Coleman, ヒロイン Marjory, ヒロインの両親 Wainwright 教授夫妻, ヒーローの恋仇 Coke, ヒロインの恋仇 Nora Black, その他, 学生 Peter Tounley, Nara Black の連れ老婦人, ギリシャ士官である。ロマンティックな愛の物語が成立するための最低の必要条件は整っている。

第一章において、ヒロイン Marjory の「ルーフアス・コールマンが、私と結婚したいと言うんです」¹⁵⁾ という言葉に、父親は驚き、反対のあまり「that drinking gambler and gambling drunkard」¹⁶⁾ とまで云ってしまう。父親は直ちに、マージョリを連れてのヨーロッパ旅行を思い付く。更にマージョリの言葉から、父親ウエインライト教授は、妻もこの結婚話に乗り気でないことを知る。¹⁷⁾ このように第一章における状況の設定によって、作品の基本的構図が描き出され、われわれ自身も、既にそのシチュエーションのメカニズムに巻き込まれているのに気付く。

次いで、コールマンに向って、淡々とした素振りでギリシャ旅行のことを語ったマージョリは、彼を送り出したあと、父に向って言う。「あの人は、私を何とも思っていないんですわ。お父さんのおっしゃったことが正しいと思いますわ。」¹⁸⁾ 他方コールマンは、マージョリ宅でギリシャ旅行のことを喋っていたコークという男が、自分のライバルだと、あとになって思い付く。

それから6週間後、コールマンは休暇をとり、マージョリのいるギリシャへ向う。途中船のなかで、背の高い若い女、踊り子のノラ・ブラックと出逢う。ギリシャに着いたコールマンは、アメリカ公使から、マージョリのいるウエインライト一行が、今トルコの Nikopolis という危険なところにいると聞き、やがて一行と出逢う。このところが第12章である。

一行の連中は皆、救い主のようにコールマンを取扱ってくれるので、コールマンは、ややヒロイックな気持となる。しかしマージョリだけは、ナイトを迎える婦人のようなポーズを示さない。にもかかわらずコールマンは、このときマージョリの姿に、神秘的な美しさと憧憬とを呼び起される。女は「I like Parthenon」¹⁹⁾ とつぶやく。

Arta へ脱出の途中、ノラ・ブラックがあらわれる。コールマンは、ブラックの慣れ慣れしい態度に憤慨するが、他方マージョリの母親は、これを計画的なしめしあわせとみて、コールマンに悪感情を抱く。その間に、一寸したことでコールマンとコークとが云い争うが、このときコークを思知らずだと叱りつける教授と、コールマンのことをよく言わない夫人とが対比されている。まもなく突然暴徒に取り囲まれたが、その危険と不安のなかで、コールマンは、初めて心情をはっきり打明ける。——「I love you」²⁰⁾ このところは第22章である。シ

ーソーゲームのように、すれ違っていたお互いの愛の距離が、ここに至って、ぐっと近づき合う。

しかしその後、ノラ・ブラックの態度に釣り込まれて、つい取乱したコールマンは、急にアテネに行きたいと云い出す。マージョリは、この言葉に対して少しも態度をくずさない。コールマンは、ただひとり飛び出すが、また一行と合流し、汽車のなかでノラ・ブラックのことで弁明をやり始める。マージョリの方は、格別うれしそうな表情を示さないし、そのことを重大視していない様子である。その間に、ヒーローとヒロインの間を裂こうとするノラ・ブラックのことが描かれ、且マージョリの母親は、コールマンの犠牲者だとみて、ノラ・ブラックに対してかなり同情的である。このような経過を通して、ヒーローとヒロインの間の愛の距離があいまいな関係になりかけたとき、マージョリは、コールマンへの愛を、アテネのホテルの一室で、彼自身に向ってでなく、父親に向って告白する。

一方アメリカ公使の到着から、第一に、制止するのも聞かないで助けに出掛けたコールマンの誠実さと愛の強さが認められ、第二に、ノラ・ブラックがやって来たことは、コールマンの全く授り知らない事実であることが判明する。このところで、ノラ・ブラックのことに關聯して、コールマンの人柄にケチをつけたマージョリの母親の姿が、アイロニカルな効果を持ち始める。

遂にウエインライト教授は、以前の考えを取消し、コールマンに結婚の許可を与える。

このような展開のなかで、ノラ・ブラックの女性らしい嫉妬の素振り、コークの浮かぬ表情、母親の俗物根性が描き出されている。そしてコールマンの直接的な喜びの表情と、マージョリの間接的なよろこびの仕草とが対照的に場面を飾り、愛のドラマは終結する。ギリシャ神話をかりて言えば、作品「Active Service」は、一つの Perseus 物語であると言えるかもしれない。

かくしてこの作品は、愛という一つの絃を奏でるロマンティックな物語であり、一見クレインの特質を持たない作品のようにみえる。しかし構成的緊密さを持たないとみられるこの作品を検討するとき、作品の内的構造のなかに、クレイン独自のテクニクを、かぎわけることができる。それは、作品の構成的枠組として打ち込まれた悲劇的アイロニイである。この点からみて、私は作品「Active Service」を、第22章までが前半、それ以後が後半という常識論に立つよりか、次の三つの展開部を認める方が正しいと思う。

第一は、第1章から第12章まで、即ちヒーロー・コールマンがギリシャに行き、ウエインライト一行に出逢うまでである。

第二は、第13章から第22章まで、即ちコールマンがヒロインに愛を告白するところまでである。

第三は、第23章から第31章まで、即ち終章のハッピー・エンドまでである。

クレインのこのテクニクは、拙稿「Stephen Craneの“War Tales”について」のなかで指摘した方法と同質のものである²⁾ 作品「The Red Badge of Courage」のなかでは、戦場におかれたひとりの兵士の心理的側面が、悲劇的アイロニイの手法をとおして、見事に浮き彫りされていた。作品「Active Service」においても、ヒロインに接するときのヒーローの心理的バイブレイションが、この手法をとおして描き出されている。具体的にみてみよう。

第一展開部において、マージョリからギリシャ旅行のことを告げられたコールマンは、言わなければ、うまく収まるにもかかわらず、次のような言葉を口に出した結果、ふたりの間の愛の距離をひろげてしまう。

"Perhaps it may happen that I shan't see you again before you start for Greece..."²²⁾

第二展開部において、ギリシャまでやって来たコールマンに向かって、マージョリが自分の気持をあらわそうとしたとき、言わなければ、彼女の気持を傷つけなくてすむにもかかわらず、次のように言って、また愛の距離を遠ざけてしまう。

"I was sent out here by the Eclipse to find you people, and of course I worked rather hard to reach you, but the final meeting was purely accidental and does not redound to my credit in the least."²³⁾

第三展開部において、マージョリが静かにひきとめるのも聞かないで、事を荒だてなくてすませるにもかかわらず、突然前後の見さかきもなく、次のような露骨な言葉を吐いて、またまた愛の距離を遠くぼやけさせてしまう。

"I'm so love with Nora Black, you know, that I have to be very careful of myself."²⁴⁾

これらの言葉が語られる三つの対話の場面は、各々展開部において中核的な箇所である。クレインは、このアイロニカルなテクニックをとおして、ヒーローの心理的側面の起伏、一種の perversity によって、心の実在と愛の不安に迫ろうとしたものと思われる。以上、一見クレインらしい特質のみられない作品と考えられた「Active Service」のなかにも、われわれは、はっきりとクレインの足跡を発見することができる。

V

「The Third Violet」の場合と同じように、この作品においても、ヒーローの感情の動きが率直に表現され、われわれ読者は、ヒーローの心理的側面の起伏を確かに辿ることができる反面、ヒロインの感情の推移は抑制され、その心の内側は、よく説明されていないため、愛の関係が見失われ勝ちとなる。それ故コールマンは、マージョリの心を充分に理解し捕捉することができないので、既に指摘したように、一種 perversity な反応を示し、激しい心理的バイブレーションを引き起す。このようなコールマンの心の動きは、「The Third Violet」におけるヒーロー、ホーカーの、ヒロイン、ファンホールに対するときの気持に近い。

その上コールマンは、これは報われぬ不毛の愛ではないかと思い、一層の不安と憧憬にかり立てられる。ここまでのところこの作品は、作品「The Third Violet」と殆ど同じであると言ってよい。

しかし作品「The Third Violet」と異なって、この作品は、一つの絃の上に様々な音色を弾き出すというモノフォニックな傾向から、一步すすんで、ポリフォニックな小説性を、クレインが努力して試みたと考えられる。私は他の拙稿で、「The Third Violet」を小説的なものというよりか、詩的なものとして結論づけた²⁵⁾ 其処での作中人物、人物と人物との間の関係は、基本的に皆ドラマの成立し難いモノフォニックなものであることをみた。今この作品におけるヒロインに、スポットライトをあててみよう。マージョリは、コールマンの前では、その真意が捕捉し難い、一見抑制された感情の持主と映るが、父親の前では、感情を率直に表明するひどく現実的日常的なイメージを帯びてあらわれる。例えば第一展開部において、コールマンと別れたあと、父に言う次の言葉は、その適例であり、このようなまなましいイメージは、「The Third Violet」のヒロインには全くみられない。

"Oh, my heart is broken! My heart is broken!"²⁶⁾

.....

"Father," she said in a hollow voice, "he don't love me. He don't love me. He don't love me at all. You were right, father."²⁷⁾

このように、コールマンに面したときの捕捉し難いマージョリと、父親に面したときの輪廓のはっきりしたマージョリという、二つのイメージがわれわれ読者の印象を横切っていく。ヒロインに背負わされたこの複数のイメージは、作品の全体的統一のなかで有機化複雑化され、ポリフォニックな効果を示し得たであろうか。

第二展開部に至って、マージョリを追ってギリシヤまでやって来たコールマンは、大理石のように冷たい彼女をみてたじろぐ。それは婦人を助けに赴いたナイトを迎える素直なよろこびのイメージから遙かに遠い。このあたりから、われわれの視点は、コールマンの視点と重なり、輪廓のはっきりしたマージョリのイメージが失われる。それ故捕捉し難いマージョリに対するコールマンのアイロニカルな言葉が、われわれにリアリテイを持って訴えてくる反面、「I like the Parthenon」²⁹⁾ というマージョリの存在は、ひどく稀薄なものとなり、イデア化されてしまう。この前後に、ヒロインが父親に直接感情を打ちあける場面も、マージョリの現実的イメージを強める間接的暗示的手法もないため、以上のような結果をもたらすのである。勿論直接的説明を嫌ったクレインが、間接的に唯一の真情を吐露する対象である父親の心の動き——恋仇コークを思知らずと言って叱りつける反面、コールマンに深い感謝と好意を抱くようになる——をとおして、マージョリの心の内部を暗示させようとしたとも考えられる。しかし観念的抽象的存在である場合は別として、マージョリのような現実的な生きた存在を示すときに、この等式は無理というべきであり、父親によって、マージョリの心の内部は少しも語られていない。それ故われわれは、コールマンの視点のなかで、次のようなマージョリへのイメージを強く感じ始める。

He was vexed, certainly, but far beyond that, he knew a deeper admiration for this girl. To him she represented the sex, and the sex as embodied in her seemed a mystery to be feared.²⁹⁾

ここから、作品におけるポリフォニックな傾向から、モノフォニックな傾向への推移と変化が、はっきりとみられる。かくしてマージョリに対する二つのイメージは、一つのイメージに掩われ始めるのである。

第三展開部における劇的場面をみよう。そこで妻のようなポーズをとるノラ・ブラックに、思わず釣り込まれて取り乱したコールマンは、突然ひとりアテネに行きたいと言い出し、更にマージョリに向かって「ぼくはノラ・ブラックをととも愛しているのだ」³⁰⁾ と言う。このときコールマンに映るマージョリのイメージには、嫉妬のひとかけらもない。この場面において、クレインはポリフォニックなターニング・ポイントを求め、そこに三角関係に基づく小説的結構とおもしろさをはめこもうと考えたようである。

しかし、この場面が、小説的構成とその論理のなかで、稀薄化をまぬがれ難いのは、第一に、クレインが安易に得意のアイロニイを用いたこと。第二に、ポリフォニックな傾向が、実は小説性と読者を意識しすぎた精神に強く支配されていたことが、その主な原因となっているとみてよい。更にまたクレインは、恋仇ノラ・ブラックに全く嫉妬を持たないマージョリを描いて、間接的に、マージョリをプラトニック・ラブと言ってよい程の、美しく純粋な愛のイメージで包み込もうとしたと考えられる。しかしわれわれは、このような美しい具体的な愛のイメージを呼び起されるであろうか。次の言葉をみよう。

She did not seem moved in any way. Coleman despaired of finding her weak spot. She was adamant, this girl.

She went away without bidding good-bye to Coleman. The sole maddening impression to him was that the matter of his going had not been of sufficient importance to remain longer than a moment upon her mind.³¹⁾

これはコールマンに映るマージョリのイメージであるが、これはまさに美しい温感のある具象的イメージと言うよりか、もっと冷たい抽象—彫刻的なイメージに他ならない。われわれの視点も、コールマンのそれとオーバーラップする。それ故全く嫉妬心を持ち合わせていない属性を描いて、そこから間接的にマージョリを美しい純一な愛のシンボルに迄高めようとしたクレインの考えよりか、われわれはこの場合、マージョリは熱情を欠如した女性のイメージからまぬがれ難い、と言った方が正鵠を射ていると思う。このことは結局のところ、ヒーローに対するヒロインの態度そのもののあいまいさ、不確かなイメージに基づくものであり、いわばクレインの間接的手法の不首尾によるといつてよい。

第26章に至って、マージョリは母を遠ざけた後、父に向って激しい感情を一気に打ちあける。即ち

“Of course, you know—I told you once. I love him! I love him! Yes, probably he is a rascal, but, do you know, I don't think I would mind if he was a—an assassin.

This morning I sent him away, but daddy, he didn't want to go at all. I know he didn't. This Nora Black is nothing to him. I know she is not. I am sure of it. Yes—I am sure of it.—I never expected to talk this way to any living creature, but—you are so good, daddy.—Dear old daddy—”³²⁾

作品の発端部において、マージョリに対して二つのイメージが、われわれの前にあらわれていた。しかし物語の展開するにつれて、次第に稀薄化されていったその中の一つのイメージ、即ち輪廓のはっきりした現実的具体的なイメージが、今このマージョリの言葉をとおして、われわれの前面に躍り出て来た。今まで作品のなかで醸成されて来た、特にマージョリをめぐるモノフォニックな基調が破られ、マージョリの激しい熱情の吐露と共に、急激に愛のドラマが成立し終結する。しかしわれわれはこのとき、二つのイメージがオーバーラップして、マージョリへの印象の混乱を打消すことができない。この印象の混乱と焦点のずれは「The Third Violet」の終結部においてもみられた。これは作品のなかで狙ったクレインのマージョリへのイメージと、実際の作品が、独立した世界のなかで作り出したマージョリのイメージとのずれに基づいている。この原因は第一に、クレインの間接的暗示的手法のあまさであり、換言すればポリフォニックなものと、モノフォニックなものとのあいまいな交錯である。第二に、モノフォニックなトーンをせきとめて、直線的に告白的な形式という、もっとも人々にわかり易い便法によって、ハッピー・エンドという通俗的な安きにつこうとしたクレインの創作への姿勢に基因している。それ故われわれは、作品をとおして象徴的香気にふれることなく、ただ愛のドラマの完成をみながら、他方ヒロインの美しいイデア的イメージが、一つの残像のようにとどまっているという実感を拭いさることができない。

VI

以上みて来たように、作品「Active Service」は、すぐれた作品というよりか、失敗作に近い。第一に、間接的手法のあまさから、クレインの意図したヒロインのイメージと、作品が作り出したヒロインのイメージとが重なり合わない。第二に「The Third Violet」と異なつて、小説化を強く求めたにも拘わらず、そのために却ってポリフォニックなものと、モノフォ

ニックなものとのあいまいな交錯が発生し、作品の核心が、小説と詩の間で宙吊りの状態になってしまっている。第三に、簡単に、悲劇的アイロニイを構成的展開の枠組としたために、クレイン独自の暗示的象徴的效果が失われている。しかしながら、失敗の本質的原因は、既述したように、作品と実生活をめぐっての問題、——即ち手紙にあらわれたクレインのなかにある。それは economical difficulty に追われていたクレインの、この作品に対する創作態度に他ならない。われわれは作品「Active Service」の背後に、読者を意識したクレインの通俗性が、自らの潔癖な感受性をくもらせ、その想像力の豊かさ、文学的手法の冴えを失わせている不幸を感じざるを得ないのである。そしてこのロマンティックな物語は、Richard Chase の言うアメリカ小説の伝統としての「ロマンス」³³⁾ から離れている。

しかしながら、この作品は、クレイン文学全体というパースペクティブに立って見たとき、作者不明の作品ではなく、やはりクレインの作品である。仮令失敗作であるとしても、この作品のなかには、クレインらしい側面が示されていることは否定し難い。第一に、悲劇的アイロニイの設定、第二に、間接的手法への試み、第三に、ポリフォニックな方向を狙いながら、結局モノフォニックな傾向に還る点、第四に、「The Third Violet」においても指摘したが、生きた女性——この場合マジョリ——をうまく描くことができない点、第五に、構成員の弱さ、つまり長篇作家ではないことを示していること。これらの点からみて、作品「Active Service」は、成功作でもなく、自然主義的作品でもないが、「The Third Violet」と同じく、クレイン文学全体のなかで、やはり一つのポジションを与えられるべき作品であると考えられる。

以上、私はこの小論において、作品「Active Service」に対して、個別的な分析と考察を試みた。その結果、この作品から、私はクレインのもう一つの横顔——アンチ・ナチュラリストに近い詩的なモノフォニックな横顔を、まざまざとみせつけられた。それ故、ナチュラリストと言われたクレインが、作品「Active Service」のような世界を創造している事実を知るとき、アメリカ文学史の通説に倣って、クレインをナチュラリストときめつけることは、傷口の大きさをみて、死そのものだとわめきたてるに似ていると言わざるを得ないだろう。

(41. 10. 25)

Notes

- 1) 拙稿「Stephen Crane の “The Third Violet” について」(岐阜大学教養部研究報告 第1号 1965)
- 2) Ibid.
- 3) R. W. Stallman & Lillian Gilkes (ed.), Stephen Crane: Letters (London: Peter Owen, 1960), P. 146. (A)-To William Crane c/o William Heineman [n]/21 Bedford St., W. C./London Sat., Oct. 29. [1897]
- 4) Ibid., P. 157. (B)-To Paul Revere Reynolds [Ravensbrook, December, 1897]
- 5) Ibid., P. 218. (C)-To James B. Pinker Brede Place/[Thursday, March 9, 1899]
- 6) Ibid., P. 218. (D)-To James B. Pinker Brede Place/March 17th '99
- 7) Ibid., P. 218. It was apparently a psychological necessity for Crane to consider each new piece of work an improvement, financially as well as artistically, over the preceding one.
- 8) Ibid., P. 219. (E)-Cora Crane To James B. Pinker Brede Place/April 25th [1899]
- 9) Ibid., P. 146.
- 10) John Berryman, Stephen Crane (London: Methuen CO. LTD, 1950), P. 229.
- 11) Edwin H. Cady, Stephen Crane (New York: Twayne Publishers, Inc. 1962), P. 149.
- 12) Ibid., P. 28.

- 13) R. Wooster Stallman (ed.), *Stephen Crane An Omnibus*, London, William Heineman, 1954 Introduction.
- 14) Edwin H. Cady, *op. cit.* P. 67.
- 15) Wilson Follett (ed.), *The Work of Stephen Crane IV* (New York: Russell & Russell, 1963), P. 20.
- 16) *Ibid.*, P. 25.
- 17) *Ibid.*, P. 23.
- 18) *Ibid.*, P. 54.
- 19) *Ibid.*, P. 143.
- 20) *Ibid.*, P. 213.
- 21) 拙稿「S. Crane の War Tales について」(岐阜大学研究報告人文科学 第11号 1962)
- 22) Wilson Follett, *op. cit.* P. 53.
- 23) *Ibid.*, P. 142.
- 24) *Ibid.*, P. 230.
- 25) 拙稿「Stephen Crane の "The Third Violet" について」
- 26) Wilson Follett, *op. cit.* P. 53.
- 27) *Ibid.*, P. 54.
- 28) *Ibid.*, P. 143.
- 29) *Ibid.*, P. 133.
- 30) *Ibid.*, P. 230.
- 31) *Ibid.*, PP. 230—231.
- 32) *Ibid.*, P. 254.
- 33) Richard Chase, *The American Novel And Its Tradition* (New York: Doubleday & Company, Inc. 1957) Introduction.